

あさぶ商店街 (麻生商店街振興組合)

北海道札幌市

インバウンド

地域課題対応

若手・女性

生産性向上

ポイント

地域の大学や NPO 法人と連携し「麻生キッチンりあん」を運営。
子どもへの学習・食事支援で「頼れる商店街」になる。

基本データ

所在地	北海道札幌市北区麻生町
人口	約 29 万人 (札幌市北区)
電話/FAX	011-707-9923 / 011-758-7345
URL	http://asabu.or.jp
会員数	91 名
店舗数	85 店舗(小売業 17 店、飲食業 31 店、サービス業 12 店、金融業 4 店、不動産業 8 店、医療サービス業 7 店、その他 6 店)
商店街の類型	地域型商店街
主な客層	主婦、高齢者 / 40 歳代、60 歳代

商店街概要

昭和 32 年に「麻生 (あさぶ)」という地名の由来になった帝国製麻工場が閉鎖すると、その跡地に道営住宅が建設され、人口が増加し、街が発展していった。麻生商店街振興組合は、地下鉄延伸を契機として昭和 49 年に設立。JR 新琴似駅と札幌市営地下鉄麻生駅に隣接しており、通勤・通学客が多い。札幌でも有数の商業集積エリアで、約 400 店舗が立地しており、多様なニーズに応えられる様々な業種が揃っている。

商店街では昭和 57 年に街路のモール化事業、平成 3 年に流雪溝整備を実施。平成 24 年には災害備品倉庫、平成 27 年には防犯カメラを設置するなど継続した投資を行いまちづくりに取り組んでいる。

取組の背景

交流の充実で「頼れる商店街」へ

札幌市主導の「商店街みらい会議」(地域の住民や様々な団体と一緒に商店街の未来を考える対話の場)や、その後の「サッポロフューチャーセッション」(学生や企業など、組織を超えて様々な市民が集まり商店街の新しい役割などを考えるイベント)を経て、地域の課題やニーズを抽出した結果、あさぶ商店街があるエリアは店舗数が多いもののチェーン店が多く、組合加入店舗が全体の約 4 分の 1 であることや、長く続く組合加盟店で店主が地元に住んでいるのは僅か 10 店舗ほどであることなどから、住民と商店街の関係が希薄になっていることが判明した。

また、麻生地域 1 万 2 千世帯の平均世帯人数は 1.74 人で、核家族化に加え、若者と高齢者の単身世帯化が進行。高齢者向けの食事(配食)のニーズや、子どもの貧困や孤食、栄養バランスの偏りなど、新たな課題が生まれていることもわかった。

これらの状況を踏まえ、商店街は大学や NPO 法人、地域住民と力を合わせ、「商いの場」から「交流の場」、「頼れる商店街」への転換を目指すこととした。

取組の内容

「キッチンりあん」で子ども支援を開始

平成 24 年、札幌市による「商店街活性化学生ア

イデアコンテスト」に藤女子大学の学生が応募することになり、あさぶ商店街での活動を想定した事業を商店街とともに検討。ひとり親家庭の子どもへの学習支援と栄養バランスのとれた食事の提供を軸にした拠点づくりを提案したところ、コンテストでは準優勝となり、市からの支援が決定した。

平成 25 年に空き店舗を活用した「へるすたでい・藤麻人(とまんと)」を開設。「へるすたでい」は健康的な食事提供と学習支援を行う場という意味を込めて「ヘルシー」と「スタディ」を組み合わせた造語だ。藤女子大学食物栄養学科の学生の実習場所として活用されており、ひとり親家庭の子どもを対象とした学習支援と栄養バランスのとれた食事の提供のほか、弁当や総菜の販売、食育・料理教室の開催、地域の主婦などが一日単位で店を借りて営業できる「一日シェフ」など、それまで地域に不足していた「交流の場」としての機能を集約した。店舗の改修費用は市の助成を活用し、家賃や水道光熱費は商店街が負担している。

学生による店舗運営が話題となり、テレビなどマスコミにも大きく取り上げられた。商店街の女性組合員が中心となってサポートし、平成 28 年には商店街女性部が発足準備を行うなど、支援や協力の輪が広がるきっかけにもなった。

平成 26 年には店舗名を「麻生キッチンりあん」(「りあん」は「つながり」を意味するフランス語)に変更。平成 28 年にはより広い空き店舗への移転

を果たし、これまでの活動を通じて必要性を感じていた子どもへの支援を強化するため「こども食堂」を新たに開始。毎月第3金曜日の午後6時～8時の間、学習支援事業を利用していない子どもたちにもバランスのとれた食事と居場所を提供するようになった。



藤女子大学生による「りあん」での調理

運営資金を捻出するために、ご当地キャラクター「あさぶー」オリジナルグッズの販売や、北海道各地の特産品や逸品を集めて販売するイベントを定期的に開催するなど、工夫を凝らしている。それでも十分な資金は集まらないが、地域の人や事業所が食材を無償提供してくれたり安価で融通してくれたりするなど、この取組に対する応援は多い。地域の力で活動が維持・展開されている。

「こども食堂」の運営は地域住民から高い評価を得ており、開催日には開店を待つ行列ができるほどの人気だ。



「こども食堂」の様子

取組の成果

反響大きく地域の消費も拡大！

「こども食堂」の反響は大きく、子育て中の母親が一息つける場所としても利用されている。現在は月1回の開催だが、実施回数を増やすことも検討中だ。

この取組により、「地域に暮らす人」と「商店街・事業者」の関係が強まり、麻生の地域価値も高められている。商店街が地域のボランティアと力を合わせて事業を行う「ボランティア部」も新たに立ち上がり、「あさぶー」の着ぐるみでのイベント出演やオリジナル商品のPRなどを通じて地域への愛着も強まっており、消費拡大にもつながっている。

実施体制

事業計画と店舗の改修については市の支援を受けており、その後も行政の広報誌での紹介やPRなどは大きな効果を上げている。

「麻生キッチンりあん」での食事や栄養に関することは藤女子大学食物栄養学科の先生とゼミの学生が担当。ゼミ活動とすることで、卒業・入学で学生メンバーが替わっても活動自体は継続できる体制になっている。学習支援はNPO法人Kacotamが担当。調理面では地域のボランティアが活躍している。

寄付も募り独自採算を目指しているが、経費や負担については商店街が最終的な責任を持つという考え方で活動している。



学習支援の様子

キーパーソンからのコメント



麻生商店街振興組合
写真左より
事務局長 奈良 正彦
事務局職員 西本 香奈江
副理事長 佐藤 典子
理事長 稲川 正勝
コーディネーター 喜多 洋子
学生チューター 佐藤 美智子

安全・安心なまちづくりへの取組

あさぶ商店街は、バス・JR・地下鉄を結ぶ交通要衝の地にあり、都市部と近隣住宅地との接点として多くの方が利用しています。当然通行量は多く、夜遅くまで人通りがあります。この街の特徴を見極め、様々な魅力を生かしながら活動を進めていかなければなりません。

少子高齢化が加速する中、防災や防犯をはじめ、人や地域とのつながりを深め、「頼れる商店街」づくりを推し進める必要があります。地域の方たちと強く連携し、商店街として積極的に取り組んでいます。

「りあん」事業の将来を見据えて

藤女子大学とNPO法人Kacotamの協力を得ながら実施している「りあん」事業は、今年度新たに「こども食堂」を開設しました。

商店街の取組としては異例ですが、この取組は、商店街が「商いの場」から「地域交流の場」へ、さらには「頼れる商店街」へと変わっていくための取組です。

その先には、商店街に活気と賑わいをもたらす原動力があり、そこから地域と商店街との信頼が生まれてくると思います。